毎日出版文化賞の人々 下

特別賞（文学・芸術部門）

杉浦康平と写植の時代 光学技術と日本語のデザイン

（慶応義塾大学出版会・4400円）

阿部卓也さん

あべ・たくや　1978年岩手県生まれ。愛知淑徳大創造表現学部准教授、デザイナー。専門はデザイン論やメディア論、記号論。

創作の未来を展望

初の単著で受賞を射止めた。「過去のそうそうたる受賞者や受賞作を見ると、光栄と言うほかありません。出版文化の歴史を扱った内容で出版文化賞というのがうれしいです」

グラフィックデザインの大家である杉浦康平さんの仕事を振り返りながら、ブックデザインを中心に、日本語の文字表現の広がりを写植（写真植字）の歴史からひもといた。

写植とは、写真の原理で文字素材の印刷用版下を作る光学技術だ。金属の活字に比べて、文字間を詰めたり、文字を変形させたりして豊かな表現ができるのが特徴だ。戦後、出版物にとどまらず広告や放送の字幕などにも活用された。しかしパソコンでの製作が主流になると姿を消した。

本書では、写植をめぐる人々の熱意や相克、企業の興亡も丹念な筆で描かれている。

「懐古ではなく未来を見据えて書きました。創作は時の技術に大きな影響を受けます。写植が消えたように、現在隆盛を極めるデジタル機器も将来どうなるか分かりません。その未来で我々はどうあるべきか。そんなことも考えてみたかった」

技術と創作の関係を考えるきっかけは、学生時代にあった。学業の傍ら「仮面ライダークウガ」の怪人のデザインを担当していた。「ちょうどその頃、撮影でフィルムを使わなくなり、デザインも主流がデジタルに移り始め、製作現場が大きく変わりました。あのときの雰囲気や感覚は今も忘れられません」

構想から約10年、執筆に5年ほどを費やした。「デジタル化が進んだ今、紙の書籍として出版する以上は、読み物としてもおもしろいものにしたかった」と振り返る。励みになったのは「当時の証言をしてくれる人たちが、こちらの取材を快く受け入れてくれて『そういう話ならこの人を』と紹介の輪が広がった」こと、そして幼い子どもたちの存在だ。「育児もしながらの執筆はたいへんでしたが、だからこそ限られた時間で集中して取り組めました」と話す。

次作は「絵本の戦後史」に挑むつもりだ。「絵と文字が不可分な絵本という存在について、デザインなどの観点からはもちろん、戦後社会でどのような役割を果たしたのかを研究したい」

【長岡平助、写真も】

2023年11月17日（金） 毎日新聞 朝刊13面より
この記事は毎日新聞社の承諾を得て転載しています。